



Title	韓国語話者による日本語破裂音・破擦音の生成及び知覚に関する実験音声学的研究
Author(s)	司空, 煥
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/45709">https://hdl.handle.net/11094/45709</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	司 空 煥
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19011 号
学位授与年月日	平成16年9月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	韓国語話者による日本語破裂音・破擦音の生成及び知覚に関する実験音声学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 土岐 哲 (副査) 教授 真田 信治 助教授 石井 正彦

#### 論文内容の要旨

本論文は、韓国語を母語とする日本語学習者に対する日本語音声教育のうち、有声・無声の音韻的対立の問題と「ザ行音」や「ジャ行音」の区別の問題について、学習者音声の音響的特性を詳細に究明し記述することと、学習者による有声性の知覚弁別に関与する音響的要因を明らかにすることを目的とする実験音声学的研究である。全8章から構成されている。

第1章では、研究の目的と意義を述べる。第2章で日韓両言語の音韻体系について子音を中心に概括的な説明を行い、これに関する既存の研究成果については、第3章で概観する。第4章は、提起した課題に取り組むために立てた実験の枠組みについて述べる。第5章から第6章では、日本語の破裂音と破擦音の音響的特性と知覚特性について、有声性の観点から実験的検証を行い、その結果について記述した。第5章は、日本語破裂音の生成面が中心である。日本語話者による語頭の日本語破裂音について、有声音と無声音の区別に有効な音響的特性は、Voice bar と氣息区間の時間長であること。また、母音間においては、閉鎖区間長及び先行母音の時間長が主な弁別素性であることを挙げ、語頭では有効な弁別特性であった氣息区間長が、母音間に来ると有効ではなくなることを指摘する。一方、韓国語話者の場合、語頭では、氣息区間の時間長だけが有声音と無声音の音響的区別に有効であるのに対し、母音間では、閉鎖区間及び先行母音の時間長に加え、氣息区間も主な弁別素性となっていることを突き止めた。さらに、日本語話者とは異なり、有声音の氣息区間長に比して、無声音の氣息区間長が有意に長いことを明らかにした。

以上のことから、韓国語話者による日本語破裂音知覚の場合、日本語話者とは異なり、声帯振動の有無ではなく、語頭では氣息性を、母音間では調音時における口腔内での閉鎖の強さを含む調音器官の緊張の度合いを調節することで、有声音と無声音を区別することを解明した。

また、日本語話者による語頭破裂音の知覚弁別では、後続母音の音響情報と氣息区間の時間長が有声性の弁別に影響を与える主な要因であったのに対し、母音間では、複数の要因が関与するが、特に、閉鎖区間の時間長と氣息区間の時間長が優先的な要因として関わることを明らかにしている。また、韓国語話者においては、語頭では氣息区間長が知覚弁別の優先的な要因であり、Voice bar は二次的に関与すること。母音間では、閉鎖区間の時間長と閉鎖区間の有声性が優先的な要因であると論じる。以上の結果から、生成の際に有声音と無声音の間に顕著な差を示さない要因であっても、知覚判断の際には有効な弁別要因として働くことを明らかにした。

第6章は、破擦音の生成及び知覚に関する研究である。語頭の日本語破擦音の生成について、日本語話者による有声音では、音響的無声化が頻繁に起きる。そのため、摩擦区間長が補助的に関与し、有聲・無声の区別を強めると考えられるが、韓国語話者が生成した有声音では、調音時における緊張の度合いの調節を通じて、有声音と無声音を区別しようとする点を指摘する。一方、母音間の破擦音の場合、有声音と無声音の区別に有効な音響的特性は、日本語話者と韓国語話者ともに、先行母音と閉鎖区間の時間長であること。また、有声音・無声音に関係なく、韓国語話者の破擦音では、調音時における調音器官の緊張の関与の度合いが、日本語母語話者の生成した破擦音以上に高いことを指摘する。そして、破擦音の有声性の知覚弁別では、日本語話者において、語頭での有聲・無声を知覚弁別する際に用いるもっとも優先的な音響的要因は、Voice bar と摩擦区間の時間長であることを示す。また、生成された有声音と無声音を区別する際、顕著に現れた音響的特性が、知覚においても有効な手がかりとして作用することを指摘する。更に、母音間では、閉鎖区間に伴う声帯振動がもっとも優先的な弁別要因であり、閉鎖区間の時間長の関与は二次的であること。閉鎖区間の時間長との時間的相関関係の中で、先行母音の時間長も関与する可能性を指摘する。

第7章では、「ザ行音」と「ジャ行音」生成上の区別について、パラトグラフを用いて調音的特性を詳細に究明する。その結果、韓国語話者と日本語話者の間には、「ザ行音」調音の際に観察される「歯基部」や「歯茎硬口蓋部」の舌と口蓋の接触パターンに大きな相違があることを明らかにし、第8章では、まとめと今後の課題、展望を述べている。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国語話者による日本語音声、とりわけ有聲破裂音と無聲破裂音、有聲破擦音と無聲破擦音の弁別・生成という、いわば古典的ともいえる課題について、科学的光を当てることにより究明すべく果敢に取り組んだ研究の成果である。これによって、従来の、とすれば主観的聴覚印象による言及の域を出なかったテーマの解明に、新たな地平を切り拓いたと言える。当該音声の知覚と生成双方の側面について、日本語話者と韓国語話者の資料を音響学的に詳細に分析した上で、改めて両言語話者について聴取実験も行い、それぞれが弁別上、どのパラメータを優先させているかについての相違点に加えて、これまであまり論議されることのなかった類似点についても丹念に追究し、詳らかにした。当該の音声は、音声学上「瞬間音」に分類されるものであるが、そこに問題があるからといって、その瞬間だけを観察していればよいというものではない。当該音声の発生する位置関係はもちろんのこと、破裂に先立つ閉鎖区間長、更には、その閉鎖に先立つ母音の性質などの音環境にも大きく影響され、反応しているものであるということを、日韓双方の資料を基に極めて詳細に解明したと言う点で、日本・韓国双方の斯界に多大な転換をもたらす可能性の高い労作であると評価できる。その意味からも、本研究の持つ意義は大きい。

ただし、残された課題がないわけではない。生成実験の結果から得られた知見をより客観性の高いものにするためには、被験者の数がより多いことが望ましい。また、知覚実験の際に提示する刺激音声の回数を増やすことにより、被験者内の「ゆれ」を最小限にする努力が必要であった。また、実験の性格上、被験者数に限界があるという点から考えれば、データの統計的検定に関しては、探索的手法の適用も考えられるが、だからといって、それらが本論文の根本的価値を損なうというわけではない。従って、本論文は、申請者に博士（文学）の学位を授与するに相応しいものであると判断する。